アートでつながる“まびの笑顔”から学んだクリニカルアートと心のケア

美作クリニカルアート

活動の目的

当会は日本臨床美術協会が推進する「臨床美術」(=独自のアートプログラムに沿って、絵画や立体造形など創造的な活動を行うことにより脳機能の活性を促し、又それによって心のケアも行う）の県下等広く一般への普及、後継者の育成を目的として会員の自主活動、チームセッション、ワークショップ等を通じて高齢者への認知症予防、子どもの感性を育む教育、社会人のメンタルヘルスケア等、様々な形で社会に貢献する活動を行う。

活動の内容及び経過

近年の日本における災害の発生を鑑みて、もし近い地域にて災害が起きた場合、被災者の災害ストレスには多大なものが有ると感じ、その場合にはボランティア活動として“心のケア”という形で臨床美術士が役に立つのではないかと考えていたが、はからずも2018年7月に倉敷真備地区に大水害が発生。すぐに被災地へのボランティア活動に入るべく決意したが時期、当会の人数、資金では不充分と考え、秋より現地での情報収集、コミュニケーション作り、調査の為、週一のペースで現地災害ボランティアセンター等に参加、準備態勢に入る。人は協会のメールマガジンの呼びかけなどにより賛同臨床美術士が8人（当会4人、香川県2人、兵庫県2人）集まったので「クリニカルアートまびの会」を設立し、2018年12月より2019年12月までの1年間、真備町内において災害支援活動を行ってきた。資金面においては福武教育文化振興財団よりの助成金等をあてる。

◆地域との連携と活動の展開

活動場所として訪問していた「ぶどうの家」は、被災にあった元の場所に再建されるまでの間の被災後の仮住まいであり、再建後（2019年7月から）は地域の人の集う場所となる。また、地域の拠点となった「ぶどうの家」は近隣に地域子育て支援センター「かなりや」とも交流がある居場所となっていたことから高齢者支援にとどまらず子育てに支援活動にも幅を広げていった。

- 2018年12月から「小規模多機能ホームぶどうの家」を利用されている高齢者の方々にクリニカルアートの体験「ぶどうの家」を実施（毎月第1金曜日午後）
- 2019年7月からは地域子育て支援センター「かなりや」に通う未就園児と保護者からの依頼を受け「未就学児とその保護者への子育て支援」として『親と子の時間「ここち」』を実施（毎月第1金曜日の午前）
- その他の活動として、2018年12月「親子遊び&ほっとサロン」2019年1月「薗親子クラブ」10月・11月「NPO法人ペアレントサポートステップ」にてクリニカルアートの体験を実施

◆被災地支援として支援者のあり方

自然災害というトラウマを抱えた被災地の人々とどのような接し方をすべきか被災地に入る場合は知っておくことは重要である。まずは、「トラウマ」「PTSD」とはどういうものか、学ぶ機会をもつメンバーにより「トラウマとPTSD　その症状」「支援者が配慮すべきこと」「支援者のセルフケア」について、メンバー全員で勉強会の機会をもち被災地支援にはいる体制をつくった。しかし、一度の勉強会では不安な要素があり、支援活動に関しては「心理士」の寄り添い支援が必要不可欠であることを念頭に置き、活動を通じて働きかけを行ってきた。まず、倉敷市保健福祉部から「まび♡こころのサポート実行委員会」の保健師に繋いでいただき、実行委員会のメンバーである川崎医療福祉大学臨床心理学科　川崎医療福祉大学付属「心理、教育相談」の協力を得ることができた。

このように被災地支援での支援のあり方については、日頃から医療現場に関わっている臨床美術士の視点が被災地での“心に寄り添う支援”に繋がり継続的に実施できた。当会のメンバーも被災地で実施する臨床美術の原点にふれることができた。

◆参加者の様子から

「アートを楽しみましょう」と声をかけて戻ってくる言葉、それは「私には描けない、、」でも寄り添いながら会を重ねるごとに笑顔がふえていく。

また、親子の時間では、はじめはじっとできなかった子どもたちが、いつしか母親の膝に座ってアートの世界を楽しんでくれた。これが「クリニカルアート」の世界と感じた。

◆メンバーの支援活動

美作クリニカルアートのメンバーは「クリニカルアートまびの会」のメンバーとして「代表」「会計」などの役、他県会員の車での送迎、資材の保管・管理等、現地会員としてすべての活動に参加。担当プログラムではメイン又はサブとして活動する。

活動の成果・効果

臨床美術はアートの世界だけではなく福祉の観点からのカウンセラーと医師3者によって創設されたプログラムをもって実施される。この観点は、今回の被災地において実施されたことで被災地に必要な“心のケア”に繋がる成果があった。

今後の課題と問題点

1年間、現地へ活動支援に入り真備地区の復興の変化を身近に感じる中、日常的には生活が戻ったと思われがちではあるが、災害の実体験の恐さ・不安に対し、被災者への“心のケア”について意識を高め、医療・保健・福祉チームが連携して継続支援していく体制が必要であり、それに臨床美術士がどれだけ関われるかが課題である。

「クリニカルアートまびの会」としての活動は12月で終了したが、2020年1月より地元関係者との話の中で要望もあり、地元関係者と協力して美作クリニカルアートの活動として4月より実施する体制でしたが、コロナウイルスの発生によりやむなく延期という事になった。

●代表者：青山利通　●所在地：美作市入田
●TEL：090-2009-6075
●E-MAIL：kawaiimumin-bytochan@ezweb.ne.jp
●設立年：2014年　●メンバー数：7名